第15回（平成26年度）
神戸大学大学院

国際文化学研究科
公開講座

ひょうご講座２０１４
受講者募集要項

●どなたでも無料で受講できます。ただし、定員（200人）になり次第、受付を終了いたします。
●申し込み方法は裏面または研究科ホームページをご覧ください。
http://web.cla.kobe-u.ac.jp/

1. 講座の目的と概要

「情報化社会の現代、情報収集能力が重要だ」といわれています。特にこの数年、携帯端末の普及によって、だれでもなんでも簡単に知ったり調べたりすることができるようになりました。しかしながら、情報というものはとにかく大量に集めれば良い、というものではありません。現に、巧妙に情報を操作した詐欺事件の被害は増えつづけており、情報の読み解き方を知らないと、簡単にだまされてしまう危険が増大しています。容易に騙されないために「読み解く技術」を磨く、ときには横から斜めから見ることで、見えていなかった側面に注目する、それが他の文系諸学とともに国際文化学研究科が目指しているものです。

高度に情報化された現代社会もまた、それを土台で支えているのは、過去に関する情報の集積であるところの「歴史」です。今回の公開講座では、私たちの日々の世界観の根幹を成す「歴史」に改めて焦点を当て、情報を読むということについて考えたいと思います。

即効性のある劇的な解決策とはいかないかもしれませんが、複雑な現代社会を生きるうえで重要な視座を与えてくれる、人間力を鍛える日々の健康サプリのような研究の一端をご紹介したいと思います。

2. 期間及び日程

平成26年10月11日(土)、10月18日(土)の2日

詳しくは裏面の「講義日程・題目及び講師」をご覧ください。

3. 受講対象者

一般社会人、学生（中学生以上）

4. 募集人員

200 人（先着順受付）

5. 講習料

無料

6. 受講申込方法

（1）受付期間：平成26年9月1日(月) から9月30日(火) まで
ただし、定員になり次第、受付を終了します。
申込期間外の受付はできません。上記期間内にお申し込み下さい。

（2）申込方法：同封の「受講申込書」に必要事項を記入し、下記に郵送，FAXまたは
E-mailで送信してください。「受講申込書」は研究科ホームページ
（http://web.cla.kobe-u.ac.jp/）よりダウンロードすることもできます。
〒657－8501　神戸市灘区鶴甲１－２－１
神戸大学大学院国際文化学研究科総務係
FAX番号078－803－7509
e-mail　gicls-soumu@office.kobe-u.ac.jp

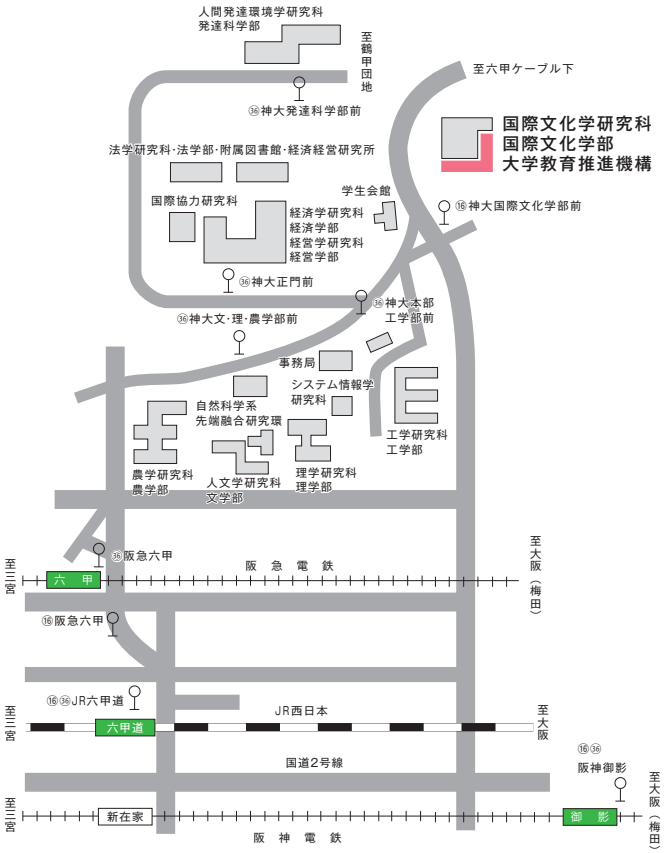
（3）問い合わせ先：
神戸大学大学院国際文化学研究科総務係
電話番号 078－803－7515
e-mail　gicls-soumu@office.kobe-u.ac.jp

7. 公開講座会場

国際文化学部・国際文化学研究科
Ｂ棟110教室（１階）

8. 公開講座会場の案内図

●交通機関
阪急六甲駅，ＪＲ六甲道駅，阪神御影駅より，
神戸市バス16系統「六甲ケーブル下」行きに乗車，
「神大国際文化学部前」下車



（注）⑯は、神戸市バス16系統六甲ケーブル下行
㊱は、36系統鶴甲（つるかぶと）団地行

http://www.kobe-u.ac.jp/guid/access/rokko/turukabuto-dai1.html

講義日程・題目及び講師

日程・時間			講義題目・講師	講義内容
10月11日(土曜日)	13:10～ 開講式			
	第1回	13:20 ～ 14:50	国家の形成と歴史小説の確立 ■言語コミュニケーションコース教授 米本　弘一	小説というものは作者の想像力が生み出した架空の話であり、所詮は作り事（フィクション）でしかないと言われる。また、歴史と称されるものも、客観的事実に基づくものではなく、ねじ曲げられた解釈が生み出すでっち上げ（フィクション）でしかないと言われることがある。しかし、小説の中で描かれていることは、本当のことではないが嘘ではない。そして、この逆説は歴史に関する言説にも当てはまる。 近代小説は18世紀にイギリスで誕生し、歴史小説というジャンルは19世紀初頭に確立されたとされている。なぜこの時代に歴史小説が書かれるようになったのかという問題は、近代社会の成立と国家の形成の過程と密接な関係がある。この講義では、歴史小説の祖とされるスコットランドの小説家ウォルター・スコットの作品に焦点を当て、当時の社会的、歴史的背景を踏まえつつ、歴史を書き、読むという行為について、フィクションと現実との関係を中心に考察したい。
	第2回	15:10 ～ 16:40	「風景」を愛することの パラドックス ～18-19世紀の英国を例に ■モダニティ論コース教授 松家　理恵	「風景」という言葉のイメージには何らかのかたちで自然の要素が含まれている。この言葉や概念は、西洋では近代になって誕生した比較的新しいものであり、そこには私たちのまわりの空間を一つのまとまった広がりとして見つめ、美を見出そうとする態度が含まれている。英国での「風景」の流行は、確かに自然の美に目を開かせ、18世紀に「風景式庭園」と呼ばれる庭を、19世紀にはターナーやカンスタブルという風景画の巨匠を生んだが、それは必ずしも自然そのものへの愛や敬意であったわけではない。歴史的に見れば、それが人間の技術力で自然を人間のために改変しようという、きわめて人間中心主義的な近代の思想と結び付いていたことがわかる。「イングリッシュ・ガーデン」と聞くと「ナチュラル」な庭のイメージが思い浮かぶが、風景式庭園は17世紀のイタリアの風景画を手本として造られ、それによってイングランドの田園風景が大きく変わってしまったとさえ言われるのである。本講では、英国の絵画や庭を例に「風景」の流行のもつ逆説的な意味を明らかにしたい。
10月18日(土曜日)	第3回	13:20 ～ 14:50	数学問題を解いて 美しくなろう ～18世紀英国女性と数学 ■比較文明・比較文化論コース教授 三浦　伸夫	一般的に言って、今日数学の苦手な女性が多いと思われているのではないだろうか。歴史上著名な女性数学者の名前を挙げることも、そう簡単ではない。では女性は数学に不向きなのだろうか。そしてこのことは人類史上普遍的なことなのだろうか。このことを歴史から考えてみることにしたい。するとそれに反して女性がこぞって数学問題を解いた時代がある。 18世紀英国では、女性用雑誌に料理のレシピや恋愛小説に混ざって数学問題が掲載され、それが大変好評であった。いやむしろ女性雑誌は数学雑誌でもあった。数学問題を解いて、知性を磨き美しくなろうとした無名の女性がたくさんいたのである。これはいったいどういうことなのだろうか。何故そのようなことがその時代その地域で生じたのだろうか。そのことから今日学ぶことができるものとは何か。画像などを交えながらその歴史を振り返ってみたい。
	第4回	15:10 ～ 16:40	越境する歴史認識は可能か？ ～空襲研究の課題に寄せて ■日本学コース教授 長　志珠絵	日本での戦争の語られ方は多くのタブーをまとっている。とはいえ、こと空襲経験については映画『火垂るの墓』やＮＨＫの朝ドラで防空体制が批判的に描かれるなど、今日なお、大衆文化のコンテンツの中に登場可能である。第一次世界大戦で登場し、第二次世界大戦下で本格化した空爆空襲は、戦後日本において、戦争被害者としての「国民の物語」を原爆被害と並んで形成してきたからである。 しかしながら、1990年代以降、戦争の語られ方は「一国」の内部に閉じて議論すべきではなく、歴史研究においても空襲が語られる際の前提を解きほぐすべき段階にある。本土都市部に限定しても440箇所以上に及んだ空襲被害だが、戦後、政府は調査機関や保証制度をもうけず、未来の安全に向けての調査や原因究明を放棄してきた。国家の情報操作や機密保持という枠組みから社会の側がいかにして情報を取り戻し、未来に向けた記録と社会的記憶を形成できるのか。戦後隠されて来た事実の解明も含め、戦争を想起する際の普遍的な問題として空襲に関わる問題系を捉え直してみたい。
	16:40～16:50 閉講式　挨拶			